

# 福祉系 対人援助職養成の 現場から<sup>18</sup>

西川 友理

## ソーシャルワークの定義が 改訂されました

2014年7月、オーストラリアのメルボルンで、国際ソーシャルワーカー連盟と国際ソーシャルワーク教育学校連盟の総会（World Conference on Social Work, Education and Social Development 2014）が開催されました。

その総会の場で「ソーシャルワークの定義」が14年ぶりに改訂され「ソーシャルワークのグローバル定義」になりました。

…という話を知り合いのカウンセラーにしたら、  
「ええっ?!そこ、変えるところ？」

と、たいそう驚かれました。いわく、  
「だって、ソーシャルワークの定義って、  
ソーシャルワーカーの実践の基盤でしょ?そんなところ、変えていいの?」  
そこで私が、

「…って言うても、ソーシャルワークの定義は10年ごとを目安に、検討し直す事になってるし…」

と言うと、さらに目を真ん丸にされてしまいました。

「それ、そんなしょっちゅう変えて、定義って言えるの?」

「うん（笑）。ええのええの。定義って言えるの。」

この定義は、2000年に改訂された時、「21世紀のソーシャルワークは、動的で

発展的であり、従って、どんな定義によっても、余すところなくすべてを言いつくすことはできない」<sup>(注1)</sup>として10年を目安に見直しをしていくという事が決められたものです。ソーシャルワーカーにとって、定義の改訂はそれほど不自然な事とは受け止められておらず、むしろ「endless educational process」として必要なものであると考えられています<sup>(注2)</sup>。日本語で言えば、「日々の精進」といったところでしょうか。

## ソーシャルワークのグローバル定義

さて、上記したとおり「ソーシャルワークの定義」は「ソーシャルワークのグローバル定義」に変わりました。

グローバル定義の内容は以下の通り。「ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい。」<sup>(注2)</sup>

グローバル定義という言葉には、「グローバル定義をもとに、それに反しない範囲で、それぞれの置かれた社会的・政治的・文化的状況に応じた独自の定義を

作ることが出来る」という意味が含まれているとされています。<sup>(注3)</sup>

私は、この中にある「地域・民族固有の知」と言う言葉に着目します。

この言葉には、「西洋の歴史的な科学的植民地主義と覇権を是正する」という思いが込められています。つまり、西洋の理論や知識、考え方、文化が、日本を含めた他諸国（ラテンアメリカ、アジア太平洋、アフリカ等）の理論や知識、文化に対して支配的になっている事や、近代的・科学的な知識がその土地の文化として受け継がれている知よりも優れたものとされている事に対する批判として示されたものです。<sup>(注4)</sup>

グローバル化が進み、国境や文化を超えた人と人の交流が激しくなり、それぞれの持つ違いが見えて、それらの違いからくる軋轢などが生まれたり、逆にお互いの違いを理解することで各々の世界が広がったり、個々の世界が繋がったり、といった事象も踏まえられているようです。

そう言われてみれば、授業で使っている社会福祉の援助技術に関する教科書に、ソーシャルワークの理論として掲載されているものは、ほとんどが欧米諸国の考え方です。それを教えるときに、確かにわずかばかりの違和感を覚えることがあるのです。

例えば、ソーシャルワークの授業において、

「ワーカーはクライアントに“何かしてあげる人”ではないのです。クライアント自身が知識や技術をもち、自分で問題解決すること目指し、それを側面的にサ

ポートする人なのです。」  
と説明しています。

この考え方は、エンパワメントと  
いて、ソーシャルワークではとても重要な  
概念の一つです。

ある時、ふと

「…いやいや、日本人って普通、専門家  
に相談する時は『なんとかしてください』  
ってゲタ預けようとしてしまうもんじゃ  
ないかな。そりゃまあ時と場合があるだ  
ろうけれど、基本的に“あなたが自分で  
問題を解決できるように”っていう支援  
をされる感覚は、日本人にとってみれば、  
ちょっと驚くんじゃないかな…。」  
ということに気づきました。

エンパワメントの考え方は、1960年代、  
アメリカにおける公民権運動などに端を  
発します。社会運動的な考え方に非常に  
親和性が高く、少数者や虐げられている  
人々が「自らの権利はしっかりと主張す  
るんだ！」という運動をする中で生まれ  
てきたものです。

なんとなく、周りの空気を呼んで、周  
囲の人々と同調して、文句があってもど  
っちかという黙って我慢して…という  
文化が主流の日本にそのまま持ってきて  
も、「素晴らしい考えだ」という受け入  
れられ方はしても、「何の違和感もなく  
あっさり取り込んで活用する」などとい  
う事は難しいのではないかと思うのです。

だからといって、日本人に対してはエン  
パワメント的ではない、“なんとかし  
てあげる”支援をすることが、正しいソ  
ーシャルワークであるとは思いません。

しかし、このことに気づいてからは、  
授業で説明する時には、まずアメリカと  
日本の文化性の話をし、受講している人

たちに納得してもらいやすいような工夫  
をするようになりました。

今回新たに示されたグローバル定義を  
読んで、「そうか、日本には日本のソ  
ーシャルワークがあるべきだよ」と、改  
めて気づかされました。

以前、この連載の第5号に、時代が変  
われば、ソーシャルワークは変わると書  
きました。また、第8号には、専門分野  
が違っている時にもソーシャルワークは  
変わるという事を書きました。

これらに加えて、地域の違いによっ  
ても、ソーシャルワークは変わるのです。

## 大阪のおばちゃんのアメちゃん

名古屋で行われた研修会でのこと  
でした。

休憩時間に、同じグループのメンバ  
ーにアメを配ったところ、神奈川からの  
参加者さんに、

「わあ、ホントに、関西の人って、アメ  
を配るんですね！」

と、ウケてしまいました。

「ああ、そういや関東の人って、あまり  
アメちゃん持ってないって聞きますね。」  
と返すと、

「しかもやっぱり、アメじゃなくて、“ア  
メちゃん”って言うんだ！スゴイ！」  
うーん、感動されてしまいました。

しかもそのグループにいた関西人の女性、  
見事に全員が「配布用アメちゃん持参」  
でした。

グローバリゼーションとか、情報化社会とか、日本中どこに行っても同じようなチェーン店が並ぶ同じような景色になったとか、そんな話はよく聞きます。ところがどっこいその土地に根差した人間の生活、文化性というのはそうそうあっさり変わるものではないようです。その一例として、「秘密のケンミンSHOW」という日本各地の独自文化を紹介する番組もあります。

所変われば品変わるといいますが、ソーシャルワークもやはりその一つだと感じます。

### 所変われば ソーシャルワークも変わる

「長らく大阪でやってたから、京都でソーシャルワークするの、難しい。山1つ超えたら、なんか違うわ」

数年前、知り合いの高齢者分野のソーシャルワーカーが言いました。

京都で生まれ育ち、長年ソーシャルワーカーとして大阪で働いてきた彼は、当時、実家近くに戻って新しい職場でソーシャルワーカーとして働き始めたばかりでした。

「もちろん、人によって性格が違うから、一概には言えないし、ちょっと排他的な地域での仕事だったから、かたよっているかもしれないけれど…」

と注釈した上で、彼は言いました。

「京都の利用者さんは外壁が硬くて大きくて、なかなか腹割ってくれへんけど、

一度腹割ったらとことん付き合う感じ。大阪は最初から腹割って話す感じやけど、最後の砦の内側は、なかなか見せてくれへん感じ。あとな、お金の話のタイミングが全然違う。大阪は、いの一番にお金の話やけど、京都は一番最後…というか、下手したらその話を出したら居心地悪そうな顔をされたこともあったわ。」

夏休み期間中の実習指導として、ある日、障害のある人が生活する施設を訪問しました。この時、午前と午後に伺った施設の支援があまりにも対照的で目を白黒させてしまいました。

午前中に伺った所は、田舎のほうにある施設です。ここは本当に山々に囲まれており、この施設の前に立つと、視界には施設と民家が3つ、あとは山、と言うような環境です。車で10分ほど行けば、スーパーがありますが、そこまでには商店も、自動販売機もないような所です。

入口の正門は全開。施設内にも、ほとんど鍵はありません。利用者は、事務室にも、施設長室にも、好きな時に好きなだけ入ります。ただし、個々人のお部屋には、原則的にその部屋の住人である利用者の許可がなければ入ってはいけないことにしているとのこと。毎日、寝る前の施設の戸締り、施錠、ガス元栓の点検等は利用者がなさっているのだそうです。

「この施設の主は利用者さん。私たちはそのお手伝いをする者。主が入っちゃいけないところはないし、戸締りだって、主がするのが当たり前でしょ？」

「すごい…徹底していますね。利用者さんが施設から各々好き勝手に出て行ってしまっただけでなく探さなくて探し回った、な

「んてことはないんですか？」

「もちろん正門は開けっ放しですから、好き勝手に出ていかれますよ。でも、危険な事についてはあらかじめ個々の利用者さんにお話してあるし、そもそも近所にはたいして危険なものもないし…好きなだけ散歩して、飽きたらみんな普通に帰ってこられますよ。それを正当な理由なく止める権利は、職員にはありません。」

「じゃあ、行動制限する事なんて、全然ない感じですねえ…。」

「いやいや、普段はそうなんですけれど、旅行で遠出する時なんかは逆にとても大変なんですよ。みんなあまり公共交通機関に慣れてないから、混乱なさったり、パニックになる人も多い。正直、施設のマイクロバスで移動するのが、職員も利用者さんも、一番楽ですわ。」

一方、午後遅くに伺った施設は、都会のど真ん中にありました。

玄関のインターフォンを押し、自己紹介をすると、

「はい、ちょっと待ってくださいね。」と、言うお返事があり、ゴロンゴロンという音と共に、大きくて重そうな門が自動で開きました。中に入るとすぐに背後で、ゴロンゴロンと門が閉まる音。職員の皆さんは全員、20個くらい鍵がついた鍵束を腰に下げています。ドア1つごとに鍵を開け閉めし、施設内を移動します。廊下を通る時、職員の皆さんが

「〇〇さん、次はそっちじゃなくてこっちよ！」

と、利用者の移動を介助してらっしゃるのを目にしました。

職員さんがおっしゃいました。

「施設の周りは車通りが多いから、絶対に安全は確保しないとイケません。この鍵の束は、それを自覚するための、自分たちへの戒めでもあります。」

「はあなるほど、危ないですものねえ、おいそれと外出できないですよねえ…。」

「ええ、でも、閉じ込めているわけではないですよ。全員順番に、少なくとも2日に一回は必ず職員と連れ立って、近所まで散歩も行くし。」

「ああ、そういう配慮をなさっていると…。」

「はい。施設の周りの賑やかな環境に慣れているからか、うちの施設の利用者さんは、ちょっと賑やかな所、人の多い所でも、パニックになりにくいかなあと思います。」

「あ、じゃあ旅行とか、外出時なんかは割とスムーズにいくんですね。」

「そうですね。そういう時にはよそゆきの顔が出来る、というか、ある種の社会性が身につけている、という部分があるように思います。」

どちらの施設も、安全で安心な生活の保障や、自立支援を旨とした支援をしようという姿勢で支援してらっしゃいました。しかし、立地によってあらわれる支援のあり方がこんなに違うものか、とあらためて驚きました。

昨年お会いした、ある市のケアマネジャーさんが、

「〇〇街道と××街道に挟まれた地域、ここは自転車で10分あれば回れる大きさやけど、そこだけ世間の常識が昭和30年

代やねん。道のこっち側では通じる常識が、あっち側では通じへん。話の持って生き方が違うねん。その点に気をつけてかかわらへんと、支援がうまいこといかへんねん。」

とおっしゃっていました。

「約半世紀の時を超えた支援ですか。その自転車、タイムマシンですねえ。」

と言うと、

「うん、壮大やろ。ドラえもんって呼んで。」

わが国の公的なソーシャルワーカーである社会福祉士の養成教育は、制度上カリキュラムが定められています。テキストもそのカリキュラムに則って作成されているわけですから、出版社によってそんなに大幅に違うことが書いているわけではありません。当然、北海道と沖縄で、明らかに違うテキストを使っているわけでもありません。養成校それぞれの方向性の違いや、各科目を担当する教員の教え方の違いによって、教育されたワーカーそれぞれに支援の個性は生まれるとは思いますが、どの地域で行うにしても、ソーシャルワークには、共通した知識や理論があります。

しかし、目に見える形で現れる支援のあり方は、その土地ごとに違ってきます。

それは、ソーシャルワークがその人の「社会生活」を対象とした仕事だからです。その土地の文化、人々によって作られた生活、つまりその風土があって、それに合わせたソーシャルワークをしようとすると、自然と立ち現れる手法は変わってきます。

というわけで、京都と大阪ではやり方が違うし、田舎と都会では支援スタイルが違うし、道一本隔てるだけで支援時の話の持っていく方は変わってきます。その土地に連綿と受け継がれてきた文化性を知ることなしにソーシャルワークはできないように思います。

### その風土に合った 支援システムをつくる

その土地の文化、人々の様相、それらを踏まえてどのような支援をしたらどのような結果になったのか、ということ、行政や世間一般に伝える事も、福祉系対人援助職の大切な仕事であると思います。

2000 年前後から地方分権という言葉が盛んに使われて来ましたが、最近ではその考え方がさらに進んで、地域主権という言葉も使われています。

国の制度政策は全国に共通する大きな枠組みを示しています。

その枠組みを、さらに地域ごとにどう運用し、その風土に合った支援システムを、どのように構築するのか。

地方行政がそれらの支援の枠組みを活用していくためには、人々の社会生活の実情を知る必要があります。

対人援助職が、支援の現場での経験や、人々と接する中で見えてきた事を行政に伝え、これに見合った支援の提案をすると、それらは、その土地に合った支援制度や施策を作る時の参考になったり、材料になったりします。その地域の社会状況、財政状況、人口動態などを踏まえ、

現実的で意味のある支援システムが出来、そうならば、日々の支援の中で、その風土に即した支援スタイルが構築しやすくなるはずです。

ソーシャルワークのグローバル定義には、様々な国の独自の知や文化を尊重しようという考え方が盛り込まれました。しかし、国と言う大きな単位だけではなく、その国の中の、もっと小さな地域でも、その風土を尊重したソーシャルワークが必要なのだと感じるのです。

.....  
注1) 「国際ソーシャルワーカー連盟のソーシャルワーカーの定義」

( [http://www.jacsw.or.jp/01\\_csw/08\\_shiryo/teigi.html](http://www.jacsw.or.jp/01_csw/08_shiryo/teigi.html) 2014年8月25日 確認)

定義に直接書いているのではなく、注釈として書かれています。

注2) 「ソーシャルワークのグローバル定義」

( [http://www.iassw-aiets.org/uploads/file/20140627\\_SW%20Definition%20-Japanese%20translation.pdf](http://www.iassw-aiets.org/uploads/file/20140627_SW%20Definition%20-Japanese%20translation.pdf) 2014年8月25日 確認)

「地域・民族固有の知」以外にも、この定義には注目すべき点が山ほど盛り込まれています。興味のある方は、『「ソーシャルワークのグローバル定義」新しい定義案を考える10のポイント』

( [https://www.jacsw.or.jp/06\\_kokusai/IFSW/files/SW\\_teigi\\_kaitei.pdf](https://www.jacsw.or.jp/06_kokusai/IFSW/files/SW_teigi_kaitei.pdf)) をご覧になってください。

注3) 同注2)の「日本語訳にかかる注釈」

ソーシャルワークの定義は、グローバル定義のもとに、そのリージョン(地域:国際ソーシャルワーカー連盟は、世界を5つのリージョンに分けています)別や、国別に定義を作るという、重層的な構造になります。

注4) 「ソーシャルワーク国際定義の再検討の進捗状況について情報提供とお願い」

( [http://www.jacsw.or.jp/06\\_kokusai/IFSW/files/SW\\_kokusaitteigi.pdf](http://www.jacsw.or.jp/06_kokusai/IFSW/files/SW_kokusaitteigi.pdf) 2014年8月25日 確認)

今回の改訂については国内外で長らく議論が重ねられました。その過程において行われた、2012年9月16日の、日本ソーシャルワーカー協会と日本ソーシャルワーク学会共催の公開セミナーとワークショップ「ソーシャルワークの国際定義の再検討」で報告されたものです。この中で、定義を再検討することは、無批判に定義を受け入れている状況、つまり思考停止に陥ってしまいかねない状況を回避するという重要な意味があると書かれています。